

フランチェスコ・ボッロミーニによるローマのオラトリオ会における ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間の計画に関する考察

岩谷 洋子*

A Study of Francesco Borromini's Design for the *salone* of Vallicelliana Library in the Roman Oratory

Yoko IWAYA*

Abstract

Francesco Borromini, the eminent architect in the Baroque Age of Rome, planned the *salon* in the Vallicelliana Library for the use of Oratorians and visitors.

As an ideal library, Borromini referred to the Barberini Library, which had almost the same size of the *salone*, specially, its vault structure. It is considered that Borromini's design of the bookshelves of 2 stories with a walkway is the development of the Barberini Library. The *balusters* of wooden pillars, which support the walkway, clearly separate the space of the bookrests from the large space of the *salone*, and create the individual and available spaces for the readers.

Then, Borromini planned the *salone* in the Library, which could provide the relaxation with the beautiful panorama as the Barberini Library, and created the comfortable studying spaces at the windows with enjoyable view.

1. はじめに

17世紀のローマにおいて活躍した建築家フランチェスコ・ボッロミーニ Francesco Borromini (1599-1667年) は、1637年から1650年代初めにかけて、ローマの信心会の1つであるオラトリオ会 Congregazione dell'Oratorio a Roma の施設全体の計画を担当した¹⁾。前年度の同紀要²⁾では、その施設内に設けられたヴァッリチェッリアーナ図書館 Biblioteca Vallicelliana が、ローマでいち早く公に開かれた図書館であるという点に着目し、宗教的な建

物の内部に世俗の外来者を受け入れるためのボッロミーニによる計画上の配慮と工夫について考察した。

本稿においては、オラトリオ会の図書館を構成する複合体の中で、特にその主室となる大広間³⁾ *il salone* 【Fig. 1】に見られるボッロミーニの独創的なデザインを探っていきたい。

*駒沢女子大学 非常勤講師

2. ボッロミーニによるヴァッリチェッリアーナ図書館の計画

2-1. 各室の配置・利用計画

ボッロミーニは、オラトリオ会の象徴であるオラトリオを、施設建物の南端に建立し、1638年中頃にそのヴォールト架構を完成させた。続いて、同会の話し合いにより、その上部に図書館を建ち上げることが決定され⁴⁾、1644年にボッロミーニは、複合体による構成の図書館を完成させた。オラトリオの南側に開かれた広場に向かい、教会堂のファサードと並んで5スパンの「オラトリオのファサード」⁵⁾が建設され【Fig. 2 a、2 b】、その2層目の背後に、図書館の主室となる大広間が位置づけられた。ところが、図書館が建設されてしばらく経った

1651年6月に、その大広間の壁が載るオラトリオのヴォールト天井に亀裂が生じてきたために⁶⁾、1665-1667年に大広間の西側の壁体が、建物の西端に移されることになった⁷⁾。その結果、大広間の長手方向（東西方向）は、現在あるように、全7スパンに拡張された⁸⁾【Fig. 3】。

したがって、現在見られる図書館は、ボッロミーニが完成させた図書館を大きく改変した後のものである。しかし、拡張される前の計画に関しては、ボッロミーニが建築書として構想していた『オプス・アルキテクトニクム』⁹⁾（以下『オプス』と略記する）の最終章（第28章）において、詳しく説明されている。この最終章は、他の章と比べてかなりの長文であるが、その文中には、ボッロミーニの計画により、大広



Fig. 1 オラトリオ会のヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間（西側から東方向を眺める）



Fig. 2a 南側の広場に面するヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間のファサード（2層目）

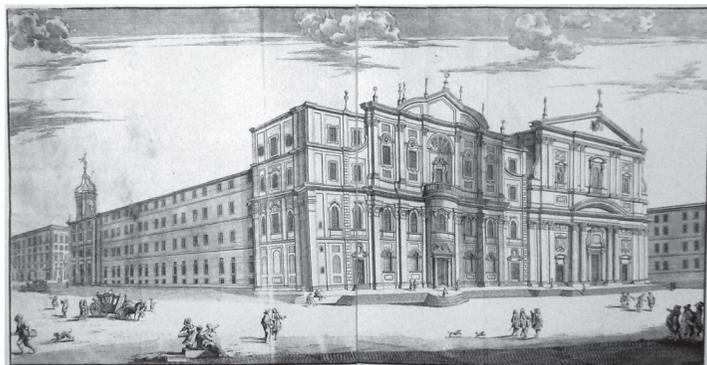


Fig. 2b 教会堂（右）とオラトリオ会施設のファサード（左）南西角部からの眺め『オプス・アルキテクトニクム』図67

間の前室および5つの部屋が、大広間の西側に設けられたと記されている【Fig. 4】。そのうちの図書館の司書室とされる2室は、教会堂とオラトリオの間にある主玄関を入り、「第一の中庭」の南側の回廊を通り抜け、主階段を2度折り返して上った正面に配置されていた。これら2室の南側に、横長の平面で、オラトリオ会士たちが部屋に持ち帰ることのできる書物を収めた開架式の1室が隣接し、さらにその南側で、建物の南西角部に当たる場所には、古文書室・古物展示室の2室が並べられていた。これら5室と大広間の間に置かれたのが、南北に細長い長方形の平面をなす、大広間の前室であった。大広間が建物の西端まで拡張された際に取り壊されたのは、これら6室の部屋である。『オプス』の本文に対して、その図版に描かれているのは、大広間が拡張された後の状態であるから¹⁰⁾、かつて大広間の西側にあったこれらの全6室は、

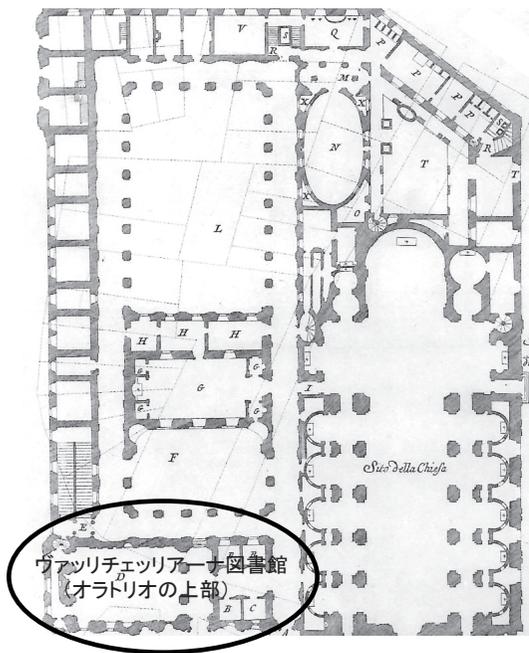


Fig. 4 ボッロミーニのヴァトリチェツリアーナ図書館の計画（平面図）
『オプス・アルキテクトニクム』図2より筆者作成

そこには認められない。

一方、大広間の東側には、3室の閲覧室が南

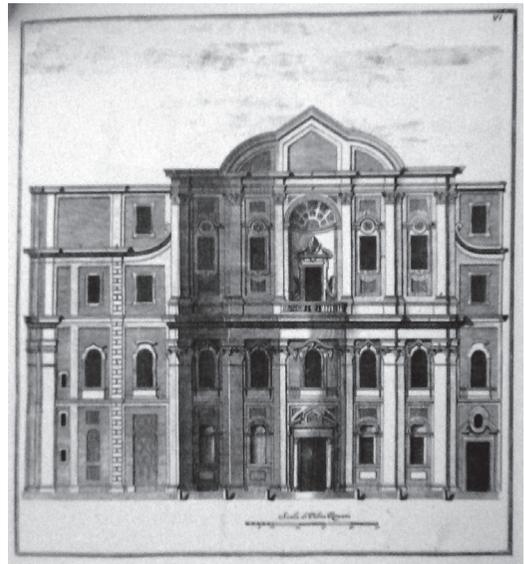
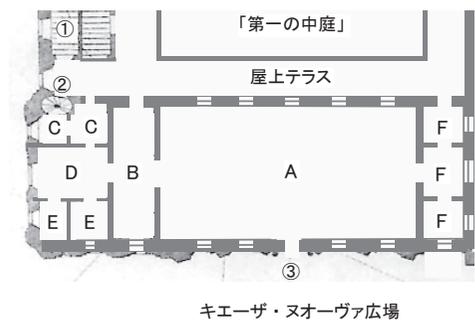


Fig. 3 大広間拡張後の南側のファサード『オプス』
図6



- A 図書館の大広間
- B アトリウム（図書館の前室）
- C 図書館司書の部屋
- D 図書の貸し出し室（開架の書架）
- E 古文書・古物などの収納・展示室、または
スパーダによるメダル収集の保管・研究室
- F 会士たち・外来者の閲覧室

- ① 主階段
- ② オラトリオ（地上）に下りる螺旋階段
- ③ 図書館のバルコニー

北方向に並べられている。オラトリオ会士たちだけではなく外来者もまた、求める書物を手にして、落ち着いて勉学に勤しむことができるように、そこには机や椅子ばかりでなく、ペンやインク、紙までが整えられていた¹¹⁾。

来訪者は、図書館の管理人に付き添われ、大広間の中で必要な書物を手渡されると、これらの閲覧室に移り、大広間は再び閉ざされた。オラトリオ会は、ローマで最初に公に開かれた図書館を実現し、広く知識を提供しようとしていた¹²⁾、旧管理体制においては、図書館の司書・管理人は、来訪者の利用に対応するために、長い時間付き添っていなければならない、これは、他にも業務を抱えている彼らにとって、大きな負担となっていた。その負担を削減し、かつ来訪者と会士たちの双方に心地良い利用を提供するために、ポッロミーニの建築計画においては、図書館の管理方式の単純化や合理的な利用法と関連付けて、各部屋の機能と配置が考えられたとされている¹³⁾。

2-2. 大広間の計画

『オプス』においては、大広間の基本的な利用や管理の方法について記されている。前述したように、外来の利用者は、管理人の付き添いなしで大広間の中を自由に歩き回って本を探したり、そこに留まって勉学したりすることが、図書館の管理上、認められていなかった。一方、オラトリオ会士たちは、大広間の1層目にある本棚から書物を取り出し、必要であれば、その場にある書見台【Fig. 5】の上でそれを開き、立ったまま閲覧することができた¹⁴⁾。さらに、会士たちは、大広間に設けられた歩廊にも上り、自由に歩き廻ることができた様子が、『オプス』の中に認められる。ポッロミーニの計画では、会士たちが歩廊を歩いて本棚の2層目にある本を探し、必要であれば、わざわざ閲覧室に戻らずに、簡易な机と椅子が設けられた2層目の窓

際に留まり、勉学に励むことができるように、細かい配慮が行き渡っていた¹⁵⁾。

しかし、落ち着いて勉学に勤しみたいときには、会士たちもまた、東側に隣接する読書室を利用したのであり、大広間の大空間の中央で、会士たちが長時間読書する仕組みは、『オプス』には説明されていない。大広間には、何よりもまず、オラトリオ会を表徴する記念的な空間が求められていたのであった。第一に、その規模の大きさによって、モニュメンタルな空間が実現されている。それは「オラトリオのファサード」に一致する5スパンの長辺と、オラトリオと同じ3スパンの短辺の平面、ファサードの2層目と同じ高さからなる大空間である。さらに、そこには、オラトリオ会の創始者フィリッポ・ネーリ Filippo Neri (1515-1585年)をはじめ、図書館の設立に対する貢献者らを記念する遺品が祀られ、絵画・彫刻などの装飾が豊かに施さ



Fig. 5 大広間の本棚付き書見台と手摺子の形状をした支柱

れた。そして、知性を尊重し、多くの書物を所有するオラトリオ会の特徴を表す本棚がそこに整えられ、そのデザインもまた独創的で、特に印象的である。

本棚に関しては、意匠上の記念性だけでなく、莫大な書物を保存・管理する収容力も、特に必要とされていた。17世紀当時、既にオラトリオ会は、手稿本と合わせて大量の印刷本を所有し、その後もさらに多くの書物の遺贈・贈呈を受ける見通しがあったから、書物は計り知れない数に増加し続け、この膨大な書物を大広間の大空間の中に収納していかなければならなかった。

それに加えて、本棚のデザインを考えるには、ファサードに開かれた窓の幅と高さ、配列に従わなければならなかった¹⁶⁾。ポッロミーニは、規則正しい配列で5つの窓を大広間の南側に開き、採光を考えて、北側の壁にも同様に、これに直面する窓を開いた。窓はかなり高い位置に開かれたから、その高さまで至ることのない1層目の本棚は、窓によって中断されることなく、壁沿いにぐりと廻らされた。ポッロミーニは、窓の底辺の高さに歩廊を設け、本棚の2層目を窓の間に割り付け、1層目と同じデザインにして一体にまとめた。大広間の大空間に対して、本棚が1層だけでは低すぎる感じが否めないが、本棚を2層構成にしたことで、大空間との釣り合いが取られ、また大きな収容力も得られた。ポッロミーニはさらに、将来的に書物が増加した時のために、その上部に3層目を付加できるように取り計らっていた。なお、本棚のデザインに関しては、『オプス』によると、オラトリオ会の旧図書館で使用されていた、たいへん見事なクルミ製で、丹念に造られていたものが、新しい図書館において再利用されたものであった¹⁷⁾。

大広間全体は、カトリックの信仰心、特に創立者フィリッポ・ネーリに対する敬意と礼賛を

テーマとし、知性の表象と合わせて、統一的にまとめ上げられた¹⁸⁾。なかでも、深く明確に区画された格間天井の中央部分に、画家のジョヴァンニ・フランチェスコ・ロマネッリ Giovanni Francesco Romanelli (1610-1662年) が「神の叡智 Sapienza Divina」の天井画【Fig. 6】を描いた。

天井の構成は、平天井であったので、ドームを掲げた集中式空間に見られるような強い中心性は得られないが、中央部分が他より大きく区分され、渦巻が付けられ、ロマネッリの絵で飾られることによって、そこに強い中心性が創り出された。また、北側の長手方向の壁面に並ぶ本棚の中央部分の1層目には、ネーリが生前所有していた書物を取めた本棚が据えられ¹⁹⁾【Fig. 7】、これに直面する南側壁面の中央部分においては、バルコニーへの出口の上部に、図書館の初代司書を務めたチェーザレ・パローニオ枢機卿²⁰⁾ Cardinale Cesare Baronio (1538-1607年)の胸像の記念碑が掲げられた【Fig. 8】。これら南北の壁体の中央部分と天井の中央区画が一体となり、大広間の空間には、平天井であっても強い中心性が生み出された²¹⁾。

ところで、ヴォールト架構とするか、あるいは



Fig. 6 ジョヴァンニ・フランチェスコ・ロマネッリによる天井画〈神の叡智〉ポッロミーニによる格天井の中央部分 1644年頃

は木造で軽量の平天井とするかは、意匠だけでなく、構造の上でも重要な問題であり、慎重な検討が必要であった。最初にボッロミーニが選択したのはヴォールト天井であったが、一般的に考えても、防火・防水の観点から、図書館にはヴォールト天井が適していた。しかし、そうすることで、1層目にあるオラトリオの大空間



Fig. 7 フィリッポ・ネーリの書物が収められた本棚（大広間の北面中央部分）



Fig. 8 チェーザレ・バローニオ枢機卿の記念碑（大広間の南面中央部分）

に架けられた大ヴォールトには、大きな負荷をかけてしまう。ボッロミーニは、自己判断だけでなく、職人の技術者たちの意見も訊き、またオラトリオ会士たちと討論を重ね、最終的には、平天井を架けることになった²²⁾。やはり、オラトリオの大ヴォールトに、大きな荷重を載せない方が良いと判断されたからである。

平天井であっても、ボッロミーニは、意匠的には強い中心性のある大空間を創り上げたが、その一方で、平天井は、大広間における見通しの効果を強調した。大広間の東西の入口に立って正面を眺めれば、本棚のコーニスや格間天井などの直線がなす水平の線によって、奥行方向の軸線が強調され、大きな見通しの効果が得られた【Fig. 9】。本棚の上部に開かれた窓と、壁の付柱もまた、奥行に向かって一定のリズムを刻み、その効果を高めている。このようにして、大空間の記念性がいっそう高められて演出されたのである。

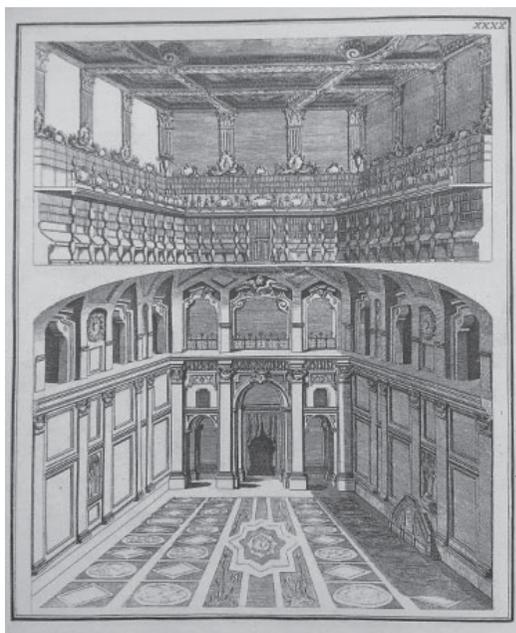


Fig. 9 『オプス・アルキテクトニクム』図40西側から眺めた断面透視図（1層目にオラトリオ、大広間は2層目で窓が省略されている）

3. ボッロミーニによる大広間の本棚のデザイン

3-1. バルベリーニ図書館とその本棚

ボッロミーニは、ヴァッリチェッリアーナ図書館の天井に、初めはヴォールト天井を架けようと思案していたが、その理由としては、その計画の少し前に完成したパラッツォ・バルベリーニ²³⁾ Palazzo Barberini 【Fig. 10】に設けられた、バルベリーニ図書館 Biblioteca Barberiniana をボッロミーニが参照していたことが挙げられる。ボッロミーニは、バルベリーニ図書館を理想的な図書館であると見做し、ヴァッリチェッリアーナ図書館の計画では、それに倣い²⁴⁾、ヴォールト架構を選択しようとしたのであった²⁵⁾。ヴォールト天井は、耐火性・防水性という機能上、図書館の架構にふさわしく、さらに、ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間とほぼ同じ規模の大空間からなるバルベリーニ図書館のヴォールト天井は、ボッロミーニにとって大いに参考になった²⁶⁾。

ボッロミーニとパラッツォ・バルベリーニとの関わりは、建築家として駆け出しの頃に遡り、カルロ・マデルノ Carlo Maderno (1556-1629年)の下で、次いでマデルノの死後にはジャン・ロレンツォ・ベルニーニ Gian Lorenzo Bernini (1598-1680年)の監修の下で、ボッロミーニはパラッツォ・バルベリーニの計画に参加して



Fig. 10 パラッツォ・バルベリーニの庭園側の館の様子(スペッキによる銅版画 1699年) 図書館は館の左半分の最上階にあった。

いた²⁷⁾。図書館の躯体が完成されたのが1633年、書架などの内装が開始されたのが1634年であるから、ボッロミーニは、この時期に、建設されていくバルベリーニ図書館を、施工現場で観察し、よく理解することができた。

また、ボッロミーニは、同時期の1634年から、パラッツォ・バルベリーニの近くに敷地を構えるサン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院 San Carlo alle Quattro Fontane の計画を開始し、1634-1635年には、その小規模な図書室²⁸⁾の計画に取り組んでいた。これ以降も、ボッロミーニは生涯にわたり、ローマにおける多くの図書館の計画に関与するが、ヴァッリチェッリアーナ図書館以前であったのは、この小さな図書室とバルベリーニ図書館のみであり、ヴァッリチェッリアーナ図書館の計画にあたっては、当然、同規模のバルベリーニ図書館をよく研究していたと考えられる。

バルベリーニ図書館の様子を知るには、ローマ大学の学長カルロ・カルターリ Carlo Cartari (1614-1691年)の記録を参考にできる²⁹⁾。ボッロミーニは、教皇アレクサンデル7世(在位 1655-1667年)の時代に、ローマ大学のアレクサンドリーナ図書館 Biblioteca Alessandrina の計画を担当し、書架などのデザインについて比較・検討するために、1659年6月から1665年1月にかけて、カルターリに同伴し、ヴァッリチェッリアーナ図書館やバルベリーニ図書館をはじめとするローマ市内の幾つかの図書館を視察した。その際、カルターリは、建物内における図書館の配置や、部屋の構成、幅・奥行・高さ、窓配列、本棚の構成・デザインなどに関して細かく記録した。バルベリーニ図書館については³⁰⁾、それがパラッツォの最上階に造られていたことから、そのヴォールト架構の大きな荷重が、その下にある部屋にかけられるが、その対処法として、ヴォールト天井を

支える様々な鉄筋が通されている点に着目し書き留めている³¹⁾。

さて、本棚に関しては、ポッロミーニがバルベリーニ図書館を理想的な図書館と見做していたのであれば、当然、その本棚のデザインについても注意深く研究していたと考えられる。

先述したカルターリは、バルベリーニ図書館の本棚【Fig. 11】に関しても、その構成を細かく観察していた³²⁾。記録によると、本棚は全体で11段で、上下2層からなり、全体構成の中で、1段目が基台ようになって他よりも外に突き出し、錠と掛け金で閉ざされた銅板が前方にあった。その上に4段が載り、さらに上には、小さな本を収める1段がコーニスのような形状で置かれていて、ここまでが本棚の1層目を構成していた。コーニスのような低い1段の上に、幅2パルモの歩廊が設けられ、鉄製の手摺が取り付けられている。2層目の高い位置にある書物は、この歩廊を歩いて探することができる。

歩廊の下には、それを支持するクルミ製の円柱が、先ほどの基台となる1段目の上に載せられていた³³⁾。カルターリは、バルベリーニ図書館の本棚の1段目の突き出した基台に本を置いて勉強ができるのではないかと記している³⁴⁾。



Fig. 11 ジョヴァンニ・バッティスタ・ソーリア (1581-1651年) のデザインによるバルベリーニ図書館の本棚 (Connors, 1980, Plate n. 133より)

上部に歩廊が廻り、両側をクルミ製の円柱に挟まれたこの場所を、カルターリは、ちょうど本を開いて立ち読みができる、落ち着いた場所として捉えたと理解できる。

3-2. ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間の本棚

ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間においても、バルベリーニ図書館と同様に、1層目の本棚の上部に、2層目の本棚と歩廊があるが、この歩廊は、バルベリーニ図書館のものとは比べて幅が広く、大きく手前に張り出している。そのため、その下に奥まった領域が形成され、そこにある書見台では、落ち着いて本を開き閲覧できる【Fig. 5】。

特に、ポッロミーニは、歩廊の支柱を考案するにあたって、計画の最初の時点では、バルベリーニ図書館のように、木製の円柱を用いようと考えていた。しかし、ヴァッリチェッリアーナ図書館では、円柱が本棚よりかなり前方に位置し、また、円柱を高さで釣り合わせて太くしなければならなかった³⁵⁾、円柱が大きく視界を遮ってしまうという問題が生じた。これを克服するために、ポッロミーニは、支柱を円柱としてデザインするのではなく、バラスター(手摺子 balaustro, baluster) としてデザインすることにしたので、円柱の従わなければならない規則から解放され、すんなりとした細長い形状に仕上げることができた³⁶⁾。バラスターの形状をした支柱が歩廊の下に立ち並ぶのであれば、少し奥まった場所にある本棚に向けられた視線は、大きく遮られることはない。それと同時に、大広間全体の大空間から、書見台のある奥まった領域が、より明確に区分された。さらに、書見台で書物を見る場所は、両側をバラスターに挟まれた個別的な空間となり、利用者は、その中で落ち着いて本を閲覧することができる。また、バルベリーニ図書館とは異なり、書見台の

前方への張り出しに対して、それより低い位置にある本棚の段は、張り出しておらず、そこに起立した状態で閲覧がしやすい。

バルベリーニ図書館の本棚との共通点は、書見台に鍵がかけられ、貴重本などを中に収めることができる仕組みとなっていること、2層目には、角部に設けられた螺旋階段を使用することなどが挙げられる。

4. 勉学と憩いの場

ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間において、5スパンある南側の壁体の中央部分に設けられたバルコニー【Fig. 12】は、ポッロミーニが創り出した独特な形態³⁷⁾から、ファサードの中心的存在となっただけでなく、忙しく勉学に励むオラトリオ会士たちが、そこからローマの景観を愉しみ、気晴らしをするという役割を果たした。このように、図書館に求めら



Fig. 12 大広間の南側ファサードの中央にあるバルコニー

れる働きの中に、景観を愉しむという内容が含まれるのは、パラッツォ・バルベリーニ図書館においても同様で、ここでは長方形平面の短辺に開かれた2つの窓から、当時はさほど都市化が進んでいない緑豊かな地域の景観を見渡すことができた³⁸⁾。

ポッロミーニは、先述したように、ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間の本棚の2層目に並ぶ窓に対して、壁の厚みを活かして小さな机と椅子を設けた。このようにして、歩廊を歩く他の利用者の妨げとならずに、また閲覧室に戻ることなく本を閲覧できる場所が整えられた³⁹⁾。オラトリオ会士たちは、明るい窓際で、通りかかる誰かに気を遣うことなく、窓越しの景色を愉しみながら、気持ち良く勉学に勤しむことができた。

ポッロミーニは、ヴァッリチェッリアーナ図書館よりも少し前に計画したサン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院においても、その細長い矩形平面の居住棟の最上階に図書室を設けたが、この図書室と教会堂との間にあるテラスには、やはり、勉学の合間にローマの景観を見渡し休憩がとれるように図られていた⁴⁰⁾。そのテラスの様子は、フランスの室内建築家ジル＝マリー・オプノール Gilles-Marie Oppenordt (1672-1742年)が、1692年に勉学のためにローマを訪れた滞在時のスケッチの中に認められる。スケッチには、図書館から出たところに、植栽の壺で飾られた、憩いの場となる屋外のテラスが描かれている⁴¹⁾。

以上のように、ポッロミーニは、図書館の計画において、利用者が、本を閲覧し勉学に励むことができるだけでなく、その合間に外部の空気に触れ、植栽を鑑賞して気持ちを和ませたり、ローマの景観を眺めて寛いだりすることもまた重要視し、図書館の果たすべき役割として、十分それに配慮し対応していた。ポッロミーニ

は、図書館を、利用者に対して勉学と憩いの場を提供する場として計画していたのである。

5. 結び

ボッロミーニによるヴァッリチェッリアーナ図書館の計画においては、オラトリオ会士と外来者の利用が合わせて考えられていた。

大広間の天井に関しては、ボッロミーニは、初めにヴォールト架構を構想したが、それには、ボッロミーニが理想的な図書館として、大広間とほぼ同規模のバルベリーニ図書館を参照していた。本棚に関しても、2層からなる歩廊付きの構成は、バルベリーニ図書館のものと共通していたが、ボッロミーニは、それをさらに発展させ、歩廊の幅を大きくとり、歩廊を支持するバラストの形状をした支柱を並べた。それによって、歩廊の下の書見台のある場所は、奥まった領域となり、また、立ち並ぶ支柱によって、この領域は、大広間の大空間から明確に区分された。さらに、両側をバラストに挟まれた個別的な空間において、利用者は書見台の上に本を開き、落ち着いて閲覧することができる。

また、ボッロミーニは、図書館を勉学の場としてだけでなく、景観を見渡し寛ぐ憩いの場所として捉え、ヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間においては、中央のバルコニーの他に、本棚の2層目にある窓の壁の厚みの部分に、歩廊を歩く人に気遣いをせずに、戸外の景色を愉しみながら勉学ができる場所を設けた。

略式表記

ASR: Archivio Stato di Roma. (ローマ国立古文書館)

Connors, 1980: Connors, Joseph, *Borromini and the Roman Oratory: Style and Society*, MIT Press (Cambridge, Massachusetts and London, England), and The

Architectural History Foundation (New York), 1980.

Documenti, 1983: Incisa della Rocchetta, Giovanni - Connors, Joseph, *Documenti sul complesso borrominiano alla Vallicella (1617-1800)*, Roma, Società Romana di Storia Patria, 1983.

Downes, 2009: *Borromini's Book—The "Full Relation of the Building" of the Roman Oratory by Francesco Borromini and Virgilio Spada of the Oratory* (Translated with a commentary by Kerry Downes), UK, Wetherby, Oblong Creative Ltd., 2009.

Opus, 1725 (『オプス』): Borromini, Francesco, *Opera del Cav. Francesco Borromino Cavata da Suoi Originali cioè L'Oratorio, e Fabrica per l' Abitazione De PP. Dell' Oratorio di S. Filippo Neri di Roma; Con le vedute in Prospettiva, Con lo Studio delle Proporzioni Geometriche, Piante, Alzate, Profili Spaccati, e Modini,....*, (edizione di Sebastiano Giannini, Roma, 1725), in Biblioteca Vallicelliana, Roma (フランチェスコ・ボッロミーニ『オプス・アルキテクトニクム』).

Ragguali, 1968: Del Piazzo, Marcello, *Ragguali borrominiani*, Roma, Ministero dell' interno, Pubblicazioni degli Archivi Stato LXI, 1968.

注

1) ボッロミーニは、1637年5月10日にオラトリオ会の建築家として承認され、1652年8月に同会の建築家を解任されるまで、オラトリオ会士のヴィルジリオ・スパーダ Virgilio Spada (1596-1662年) の助言を

受けながら、施設全体の計画に取り組んだ。ボッロミーニの計画については、上記の「略式表記」の他に、重要な基本文献として、さらに以下の文献史料・論文が挙げられる：Hempel, Eberhard, *Francesco Borromini*, Wien, Kunst Verlag Anton Schroll & Co., 1924; Pollak, Oskar, *Die Kunsttätigkeit unter Urban VIII*, Band I, Wien, Dr. Benno Filser Verlag, 1928; Incisa della Rocchetta, Giovanni (trascritto da), “Un dialogo del P. Virgilio Spada sulla fabbrica dei Filippini”, *Archivio della Società Romana di Storia Patria*, XC, 1967, pp. 165-211.

- 2) 駒沢女子大学『研究紀要』第25号 2018年12月 pp. 229-248.
- 3) 『オプス・アルキテクトニクム』（以下『オプス』と略記）において、図書館の計画について説明する第28章の文中では、大広間が「図書館 Libraria」と記される場合が多い：Opus, 1725, Cap. 28. 本稿における「大広間」とは、図書館の複合体の中心をなす

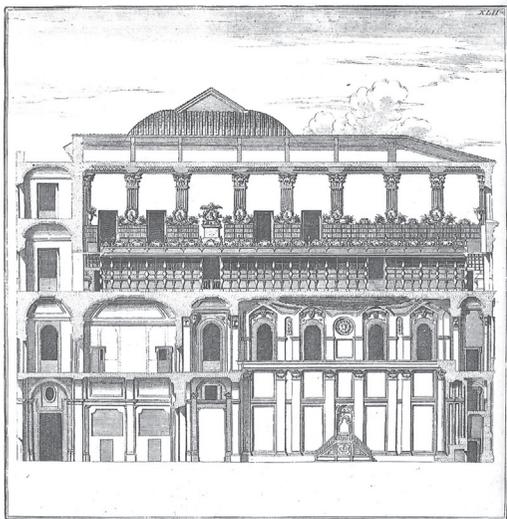


Fig. 13 『オプス・アルキテクトニクム』図42（オラトリオおよび図書館の南側断面図）

- 大空間で、書棚を並べた大きな主室を指す。
- 4) 1638年8月17日に、オラトリオ会の評議委員が、図書館を、建物南側にあるオラトリオの上部に配置するのが良いとの意見をまとめ、21日には、同会の全体会議でこれが、受諾された。しかし、重大な決定事項であるため、翌月までしばらく時間が置かれた後、9月11日に全体会議で全員の賛成票が得られ、最終的に決定されるに至った： *Documenti*, 1983, pp. 44-45, nn. 115, 116, 118.
 - 5) 広場から眺めると、「オラトリオのファサード」は、1層目が7スパン、2層目が5スパンからなる独立した形態である。しかし、実際のオラトリオは、ファサードの1層目の中央部分から、建物の西端の角部にかけて配置された。そのため、本稿では、オラトリオのファサードに見えるように造られた部分を、「オラトリオのファサード」と鉤括弧付きで表記した。
 - 6) オラトリオのヴォールトだけでなく、図書館自体の壁体にも、ひびが入っていた。Incisa della Rocchetta, Giovanni, “Il salone della Biblioteca Vallicellana” *Palladio*, N. S. XXIII, 1973, (pp. 121-128), p. 127 ; *Documenti*, 1983, pp. 89-90, nn. 291-293; Connors, 1980, pp. 52-53.
 - 7) 拡張計画は、1667年よりオラトリオ会の建築計画を担当していたカルロ・ライナルディ Carlo Rainaldi (1611-1691年) のもとで実施された：Incisa della Rocchetta, “Il salone ...”, *ibidem*, p. 128; *Documenti*, 1983, pp. 129-132, nn. 449, 450, 453-455, 457, 459, 460, 461, 465; Connors, 1980, pp. 276-278, Cat., nn. 100, 101.
 - 8) 『オプス』図42の断面図において、大広間の長手方向全体が8スパンに描かれている

- が、実際には2スパンが拡張されたので、全7スパンとなる。おそらく、拡張された箇所の西側角部の幅が広いために、ジャンニーニは、1スパン多くして3スパンに描いてしまったと考えられる：Downes, 2009, pp. 479, 481.
- 9) *Opus*, 1725. ボッロミーニとオラトリオ会士のスパーダ司祭が、協働で建築書を出版しようと意図して、1646年頃から制作に取りかかったが、実現に至らず、残された手稿や図面をもとに、1725年にジャンニーニによって出版された：Borromini, Francesco (a cura di Joseph Connors), *Opus Architectonicum*, Milano, Edizioni Il Polifilo, 1998, “Introduzione”, pp. XX e segg.
 - 10) *Opus*, 1725, tavv. IV, XXVII, XXXIX, XLI, XLII, LVI, LVIII, LXVIII.
 - 11) *Opus*, 1725, Cap. 28.
 - 12) Bonadonna Russo, Maria Teresa, “Origini e vicende della Biblioteca Vallicelliana”, *Studi Romani* XXVI, 1978, (pp. 14-34), p. 15 ; Abbamondi, Lorenzo, “Nascita di una biblioteca moderna. La Vallicelliana di Roma, dal lascito istitutivo di Achille Stazio (1581) all’ anno della morte di Cesare Baronio (1607)”, in *I libri di Cesare Baronio in Vallicelliana*, a cura di Giuseppe Finocchiaro, Roma, Ministero per i beni e le attività culturali, Direzione Generale per i Beni Librari, gli Istituti Culturali ed il Diritto d’Autore, Biblioteca Vallicelliana, 2008, (pp. 155-192), p. 166; 拙稿『研究紀要』前掲書(注2) 2018年 p. 230.
 - 13) *Opus*, 1725, Cap. 28.
 - 14) Ibidem.
 - 15) Ibidem.
 - 16) Ibidem.
 - 17) Ibidem. 旧図書館の本棚には、そこに収められた書物の内容を示す、金箔を塗ったクルミ製の板が付けられていたが、ボッロミーニは、これもまた、歩廊の保護と手摺の装飾に再利用した： *Opus*, 1725, Cap. 28.
 - 18) Scott, John Beldon, “The Counter Reformation Program of Borromini’s Biblioteca Vallicelliana”, *Storia dell’ Arte* n. 55, Firenze, La Nuova Italia Editrice, 1985, pp. 295-304; Downes, 2009, pp. 483 e segg.
 - 19) Incisa della Rocchetta, “Il salone ...”, *op. cit.*, 1973, p. 126; *Documenti*, 1983, p. 101, n. 338; Downes, 2009, p. 484, n. 297, p. 485.
 - 20) バローニオは、1593年にフィリッポ・ネーリの後を継ぎ、オラトリオ会の総長となった。バローニオは、さらにヴァッリチェッリアーナ図書館の初代図書館司書を務め、その『キリスト教会編年記 *Annales ecclesiastici*』の編纂は、その功績として広く知られている。
 - 21) Scott, “The Counter Reformation Program ...”, *op. cit.*, 1985, p. 295 (右段).
 - 22) *Opus*, 1725, Cap. 28; Incisa della Rocchetta, “Il salone ...”, *op. cit.*, 1973, p. 128; *Documenti*, 1983, p. 63, nn. 186, 187; Connors, 1980, p. 49.
 - 23) パラッツォ・バルベリーニは、1625-1633年に建設された。当時のサン・ピエトロ大聖堂建設計画の建築家を務めていたカルロ・マデルノ Carlo Maderno (1556-1629年)の計画により開始され、ボッロミーニとベルニーニは、そのもとに働いていた。マデルノの没後、計画の指揮を執ったのはベルニーニであったが、ボッロミーニは、

引き続き計画に参加していた。その敷地は、17世紀当時には田園の雰囲気の一帯にあり、H型平面の館は、ヴィツラのような趣で、背後に広がる庭園との繋がりを考えて計画されていた。バルベリーニ図書館は、館のエントランスのファサードに向かって右側の最上階に位置していた。パラッツォ・バルベリーニの計画に関しては、Blunt, Anthony, “The Palazzo Barberini: The Contribution of Maderno, Bernini and Pietro da Cortona”, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol. 21, No. 3/4, pp. 256-287; Hibbard, Howard, *Carlo Maderno and Roman Architecture 1580-1630*, London, A. Zwemmer Ltd., 1971, pp.80-84, 222-230; Waddy, Patricia, “The Design and Designers of Palazzo Barberini”, *Journal of The Society of Architectural Historians*, Vol. XXXV, No. 3, October 1976, pp. 151-185. 特に、バルベリーニ図書館の計画に関しては、Tetius, Hieronymus, *Aedes Hieronymus, Aedes Barberinae ad Qvrinalem*, Roma, Excudebat Mascardus 1642, p. 42 ; Specchi, Alessandro, “Veduta posteriore del mede mo Palazzo Barberino con facciata e scala che porta al giardino, et al piano della sala”, Roma, 1699, n. 20; Waddy, Patricia, “Maderno e Borromini: Plan and section”, in *An Architectural Progress in Renaissance and Baroque Sojourns In and Out of Italy. (Essays in Architectural History Presented to Hellmut Hager on his Sixty-sixth Birthday*, ed. by H. A. Millon and S. S. Munshower), Papers in Art History from the Pennsylvania State University Vol. VIII,

part 1. 1992, pp. 197-198, p. 210, Fig. 8-11 (pp. 194-223) ; Downes, 2009, pp. 475-479.

- 24) Downes, 2009, p. 474, fig. 49には、両図書館の平面の縦横の長さが比較され、大きさが明確に示されている。両者はほぼ同じ奥行で、幅はバルベリーニ図書館の方が1m34cm短い。
- 25) 後述の注30を参照。
- 26) Connors, 1980, pp. 49-50; Scott, “The Counter Reformation Program ...”, *op. cit.*, 1985, p. 301.
- 27) 建物の正面ファサードの右手にある螺旋階段が、ボッロミーニによる計画である。ここから、直接最上階の図書室まで上って行くことができたとされる：Waddy, “Maderno e Borromini: ...”, in *op. cit.*, 1992, p. 210, Fig. 8-11.
- 28) ボッロミーニが、建築家として独立した後、最初に、1634年にサン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ聖堂とその修道会施設 San Carlo alle Quattro Fontane, la chiesa e il convent dei Padri Trinitari Scalzi の計画を請け負った。その図書室は居住棟の最上部に造られた。当時の修道士が残した記録から、ボッロミーニの計画により修道院が立ち上げられていった様子を知ることができる：San Carlo alle Quattro Fontane di Francesco Borromini, nella ‘Relazione della fabrica di fra Juan de San Buenaventura (a cura di Juan María Montijano García), Milano, Edizioni Il Polifilo, 1999.
- 29) カルロ・カルターリ Carlo Cartari (1614 - 1691年) は、アレッサンドリーナ図書館の本棚の計画のための視察として、ボッロミーニの同伴により、ローマの図書館を見学して廻った。残されたその詳細な記録は、

- ローマの図書館の計画と当時の様子を把握するための重要な史料である。ASR, Cartari - Febei, 185 : *Ragguali*, 1968, p. 135, pp. 228-231; Connors, 1980, pp. 155-156, Cat. 23 (a-d).
- 30) ASR, Cartari - Febei, 185, cc.110r-111v: *Ragguali*, 1968, p. 231; Connors, 1980, pp. 155-156, Cat. 23d.
- 31) Ibidem.
- 32) Ibidem.
- 33) Connors, 1980, pp. 155-156, Cat. 23d.
- 34) Ibidem.
- 35) *Opus*, 1725, Cap. 28. 建築の柱は、それぞれのオーダーに見るように、柱の太さとの秩序だった関係において、その高さが決定される。バルベリーニ図書館の本棚は、1633-1635年にジョヴァンニ・バッティスタ・ソーリア Giovanni Battista Soria (1581-1651年) が制作したもので、1902年に図書館がヴァチカン図書館の中に移された際に、本棚もまた持ち運ばれた。Connors, 1980, fig. 133.
- 36) 手摺子の形状であれば、円柱の従うべき秩序からは解放されるという考えである。
- 37) *Opus*, 1725, Cap. 28 および **【Fig. 2a, 2b】**. 緩やかな凹面を描く「オラトリオのファサード」の中央部分に、楕円形の平面のバルコニーが張り出している。
- 38) 注30を参照。
- 39) *Opus*, 1725, Cap. 28.
- 40) カルターリとポッロミーニは、サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ修道院の図書室にも視察に訪れた：ASR, Cartari-Febei, 185, c. 95: *Ragguali*, 1968, p. 231. 修道院の居住棟は、1634年7月から1635年にかけて建設され、図書室はその最上階の4層目に設けられた。Montijano García, (a cura di), *San Carlo alle Quattro Fontane ...*, *op. cit.*, 1999, pp. 28-30, 52-55. この他に、ポッロミーニによる図書室の図面がベルリン国立美術に所蔵されている (Staatliche Museen zu Berlin, Kunstbibliothek, inv. 1049. ベルリン館所蔵) : Portoghesi, *Francesco Borromini*, Milano, Electa Editrice, 1977, (1^a 1967), p. 76; Connors, Joseph, “Un teorema sacro: San Carlo alle Quattro Fontane”, in *Il giovane Borromini* (a cura di Manuela Kahn-Rossi e Marco Franciolli), Milano, Skira editore, 1999, p. 482 (pp. 459-512), Cat. n. 260; Portoghesi, Paolo, *Storia di San Carlino alle Quattro Fontane con una appendice sul cantiere e le maestranze di Marisa Tabarrini*, Roma, Newton & Compton Editori, 2001, pp. 29-34, 38, 41-42.
- 41) Kunstbibliothek, Berlin, Hdz. 2405. 85r: Connors, Joseph, “Borromini in Oppenord’s Sketchbooks”, *Ars naturam adiuvans. Festschrift für Matthias Winner*, Mainz am Rein, 1996, p. 602 (pp. 598-612) ; Portoghesi, *Storia di San Carlino...*, *op. cit.*, p. 38.

図版名および出典

Fig. 1 ローマのオラトリオ会のヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間 (西側から東方向を眺める)

Fig. 2a 南側の広場に面するヴァッリチェッリアーナ図書館の大広間のファサード (ローマ、キエーザ・ヌオーヴァ広場)

Fig. 2b 『オプス・アルキテクトニクム』図67

Fig. 3 『オプス・アルキテクトニクム』図6
ヴォリュート (ファサードの2層目にある渦巻形) から上が、後に拡張された部分

Fig. 4 ボッロミーニのヴァッリチェリアーナ図書館の計画 平面図（『オプス・アルキテクトニクム』図2より筆者作成）

Fig. 5 大広間の本棚付き書見台と手摺子の形状をした支柱

Fig. 6 ジョヴァンニ・フランチェスコ・ロマネッリによる天井画〈神の叡智〉（ボッロミーニによる格天井の中央部分 1644年頃）

Fig. 7 フィリッポ・ネーリの書物が収められた本棚（大広間の北面中央部分）

Fig. 8 チェーザレ・バローニオ枢機卿の記念碑（大広間の南面中央部分）

Fig. 9 『オプス・アルキテクトニクム』図40（西側から眺めた断面透視図（1層目にオラトリオ、大広間は2層目で窓が省略されている）

Fig. 10 パラッツォ・バルベリーニの庭園側の様子

Specchi, < *Veduta posteriore del medesimo Palazzo Barberino ...* >, Roma, 1699.

Fig. 11 ジョヴァンニ・バッティスタ・ソーリア（1581-1651年）のデザインによるバルベリーニ図書館の本棚（Connors, 1980, Plate n. 133より）

Fig. 12 大広間の南側ファサードの中央にあるバルコニー

Fig. 13 『オプス・アルキテクトニクム』図42（オラトリオおよび図書館の南側断面図）

*Fig. 1、Fig. 2a、Fig. 5、Fig. 6、Fig. 7、Fig. 8、Fig. 12は、筆者撮影。

